

増上寺第三十六世明蓮社大僧正顯誉上人愚心祐天大和尚（一六三七―一七一八、以下尊称を略す）は、地藏菩薩の生まれ変わりとして仰がれ、民衆からも徳川家からも、そして皇族からも帰依を受けた近世まれに見る高僧である。祐天の活躍した時代は、綱吉公から吉宗公の治世であるが、綱吉公の時代、桂昌院は隆光上人との結び付きが非常に強かったことは周知のことである。しかしながら、桂昌院が増上寺に葬られたことは意外に知られていない。本小論では、祐天と桂昌院の関係を通して、その時代における徳川家と浄土宗の関係についての考察を試みる。

祐天は増上寺学頭袋谷寮檀通（のちの光明寺四十三世）に隨身したが、師の没後増上寺に帰山し、二臘の席まで昇進した。ついに檀林主になろうかというときに、祐天は増上寺を引

退し、草庵生活に入る。貞享三年（一六八六）、祐天五十歳のときであった。草庵では、ひたすら念仏したり、名号を書写してそれを民衆に施与する生活であったと伝記には記されている。<sup>※1</sup>

草庵生活に入れば通常は表舞台に出ることはないと考えられるが、『縁山志』の元禄八年（二六九五）四月二十三日の記述<sup>※2</sup>に、突然桂昌院とともに祐天の名が登場する。引退僧が増上寺において、他の檀林主などと同席し、しかも桂昌院という時の人と相い対するということはどういうことであろうか。そこには、増上寺における祐天の地位などがわかる記述はいっさいない。

表一（二八六―二八七頁、参照）に、それ以後の桂昌院の増上寺参詣についてまとめた。

それによると、祐天は増上寺を引退しているにもかかわらず、桂昌院から破格の待遇を受けていたことがわかる。また当初は、桂昌院の私的な増上寺への御入であったが、年々公式行事化していった様子がその立会者の数や拝領物の増加からうかがえる。いずれにしても、桂昌院は祐天に特別に説法を申し付けており、桂昌院の増上寺参詣の目的は、まさに祐天に会いにいったことは明らかである。

また、この頃のエピソードとして、祐天と桂昌院の会話の記録が残されている。<sup>※3</sup>これから、祐天と桂昌院の関係の緊密さが読み取れる。要約して記せば、祐天は、政務に忙しい将軍が学問に励まれるのを氣遣って、病気になるはしませんかと桂昌院にうかがうが、桂昌院から、

文学は政務の糧であるから控えよとは申すべきでないと逆にたしなめられてしまうという話である。

表一 増上寺における桂昌院との法門（『浄全』一九、四二〇～二）

| 日付             | 法門の内容                   | 主たる法門主    | 参列者  | 拝領物（大僧正を除く）   |
|----------------|-------------------------|-----------|--|---|
| 元禄七年<br>八月二十六日 | 「念仏の有りがたき儀」<br>「延年転寿」   | 了也大僧正     | 大光院<br>祐天<br>役者秀圓<br>役者吟達<br>了俊<br>了専                                      | 衣地緋縮二卷<br>緋羽二重五局<br>銀五枚<br>銀三枚<br>銀三枚<br>銀一枚                                    |
| 元禄八年<br>四月二十三日 | 「浄土本縁経」<br>「現世無比衆後生清浄土」 | 了也大僧正     | 大光院<br>祐天<br>役者秀圓<br>役者吟達<br>了俊<br>了専                                      | 銀五枚<br>銀三枚<br>銀三枚<br>銀一枚  |
| 元禄九年<br>四月八日   | 「仏證生の法則」                | 了也大僧正     | 大光院<br>蓮馨寺<br>祐天<br>天徳寺<br>行安寺<br>龍松院<br>法隆寺中院<br>清熏<br>役者秀圓<br>役者吟達<br>ほか | 縮緬二卷金二千疋<br>縮緬三卷金二千疋<br>金千疋<br>金五百疋<br>縮緬二卷<br>金二千疋<br>銀十疋<br>銀五枚<br>銀三枚<br>銀三枚 |
| 元禄十年<br>三月二十九日 | 「神力演大光」の句<br>現当二世の利益の念仏 | 蓮馨寺<br>祐天 | 伝通院<br>大光院<br>蓮馨寺<br>清熏<br>祐天<br>天徳寺                                       | 紗綾十卷<br>縮緬五卷<br>縮緬五卷銀五枚<br>金二千疋<br>縮緬三卷銀五枚<br>金千疋                               |

|   |   |
|---|---|
|   | 元禄十一年<br>三月二十九日                                     |
| 現世無比案の文<br>十八願  |   |
| 祐天<br>龍源寺   |   |
| 祐天<br>龍源寺<br>同<br>隱居<br>感應寺<br>空無<br>正覚寺<br>龍松院中院<br>壽光院<br>花陽院<br>大信寺<br>心光寺<br>心法寺<br>長周<br>分周<br>了無(納所)<br>歷問(納所)<br>最勝院<br>惠眼院<br>寶松院<br>天陽院<br>月光院<br>見超<br>吟達<br>天徳寺<br>蓮馨寺<br>大光院<br>伝通院         | ぼか<br>行者吟達<br>役者秀圓<br>納所<br>了無<br>壽昌院<br>心法寺<br>行安寺 |
| 紗綾十卷<br>縮緬五卷<br>縮緬五卷<br>縮緬三卷<br>縮緬三卷<br>縮緬三卷<br>縮緬二卷<br>縮緬二卷<br>銀二枚<br>銀二枚<br>金三百疋<br>金三百疋<br>銀二枚<br>銀二枚<br>金三百疋<br>羽二重二疋<br>紗綾二卷<br>紗綾二卷<br>羽二重二疋<br>金五百疋<br>金五百疋<br>金五百疋<br>銀二枚<br>銀二枚<br>紗綾三卷<br>銀五枚 | 金五百疋<br>羽二重二疋<br>羽二重二疋<br>三百疋<br>三百疋<br>銀五枚<br>銀五枚  |

元禄十二年（二六九九）二月祐天は増上寺了也大僧正に連れられて登城し、大巖寺住職を拜命する。<sup>※4</sup>すでに引退した僧が檀林に出世することはまさに異例である。その背景にあるのは、先に述べた桂昌院と祐天の関係にほかならない。直接的には、『徳川実記』の「祐天浄業精修の聞えありて。桂昌院殿こはせ給ふ御旨もあれば」などの記述であるが、間接的にも、祐天が大巖寺に出世した折、桂昌院から贈られたとされる「純子幡」<sup>※5</sup>があることなどが挙げられる。

また『縁山志』<sup>※6</sup>の記述に、元禄十一年以降元禄十四年九月まで桂昌院の御入なしとあるが、『縁山志』では、この理由を大僧正隠居のためという立場を取っている。しかしながら、了也大僧正の隠居は元禄十二年九月二十七日であったこと<sup>※7</sup>などから、祐天が江戸を離れたためと解釈するほうがより自然である。

その後、表面上、祐天と桂昌院の直接的な接点は、元禄十五年になるまで出てこないが、御前法門という公式の場に祐天は登場するようになった。その後も桂昌院との私的な法門は記録にないが飯沼弘経寺に転住していたためと思われる。

宝永元年（一七〇四）十三日鶴姫卒、十五日増上寺に送られる。<sup>※8</sup>『飯沼弘経寺志』によれば、

当時役者をしていた霊仙寺四十七世智廓が鶴姫君所持の「御守本尊厨子入御紋打敷き幡」を拝領した<sup>※9</sup>とあり、祐天寺にも鶴姫君自筆の弥陀三尊画が伝わっている。このことは、桂昌院を通して、祐天に対する信仰が大奥の女たちに広がっていたことを示す一つの証拠となろう。

#### 四

#### ●桂昌院の臨終

宝永元年十一月二十七日、増上寺雲臥大僧正が引退を許されると、伝通院門秀の増上寺拝命と同時に、祐天は伝通院住職を命ぜられた<sup>※10</sup>。その後、祐天は増上寺らに同行する形で、頻繁に城へ上がっている。

このような、状況の中、宝永二年（一七〇五）六月二十二日いよいよ桂昌院は臨終のときを迎えた<sup>※11</sup>。

祐天の弟子によって記述された「鎌倉光明寺檀通上人御腹内書附」<sup>※12</sup>によると、

桂昌尼公終焉之砌祐師登 城<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>御対顔<sup>一</sup> 十念授与撮取系握<sup>ニ</sup>両手<sup>一</sup> 而終<sup>レリ</sup> 焉不<sup>レ</sup>乱<sup>カマハ</sup>

〔割注〕 貞誉僧正證譽湛譽<sup>一</sup> 三僧正各列座<sup>シ</sup>而以称名同音<sup>ナリ</sup> 己上刻即如<sup>シ</sup>入<sup>レ</sup>禪定<sup>一</sup>

と了也・雲臥・門秀の三僧正列座する中、祐天が十念を授け善知識を勤めたごとくの記述である。

より客観的な資料として『隆光僧正日記』があるが、<sup>\*13</sup>それによると二十二日、まず明六つ半過ぎ、護国寺・進休庵それに隆光が駆け付け、臨終正念の祈禱をなしたとある。次に五つ半頃、了也と祐天が駆け付け、十念を授け、祐天が桂昌院の呼吸に随って念仏したことが記されている。四つ時薨去され、理趣経一卷が誦まれたと祐天は念仏したとあり、祐天が臨終行儀を行ったことは明らかである。また、命終に増上寺は間に合っていないかった。

葬送は、増上寺で行われた。生前は、護持院・護国寺を大事にした桂昌院であったが、最後は浄土宗に帰依した形で葬られたことは、浄土宗教団にとっても大きな意味のあったことであろう。そして、それは増上寺への信仰ではなく、祐天と桂昌院の間に培われた信頼関係・信仰に帰するものであると結論することができる。

## 五

### ● 終わりに

従来、桂昌院と言えば護持院・護国寺というイメージが定着しているが、晩年は熱心な浄

土宗の帰依者であったことが明確になったと思う。それは、おそらく祈祷を中心とした現世利益的な信仰を中心としてきた桂昌院が、怨霊解脱あるいは名号の利益という話題性のあった一介の引退僧・祐天に興味を持ったことから出発したと考える。そして、祐天と直接対話し、法門を繰り返すうちに念仏の真の功德というものが理解されるようになったものと思われる。残念ながら、綱吉公までもその信仰に引き入れることはできなかったが、桂昌院の信仰は確実に大奥へ引き継がれ、大奥での浄土宗信仰が定着した。これは、祐天への信仰と言いうこともでき、祐天は綱吉公の浄土宗離れから徳川家の信仰を再び浄土宗に引き戻した、事実上の浄土宗の中興主と言えよう。

#### 註

※1 伝記および経歴については、拙著「顕誉祐天の伝記について」(『大正大学大学院研究論集』十九、同「顕誉祐天の経歴——その二、三の問題——」(『同論集』二十)を参照。

※2 『浄全』十九、四二〇頁

※3 『常憲院殿御実記』附録(『徳川実記』六、七三六頁)

※4 『常憲院殿御実記』元禄十二年二月四日の項

※5 『生実大巖寺志』(『浄全』二十、八一頁)

※6 『浄全』十九、四二二頁

※7 『浄土宗大年表』五二六頁など

※8 『常憲院殿御実記』宝永元年四月十三日の項



- ※ 9 「飯沼弘経寺志」(『浄全』十九、八四一頁)
- ※ 10 『浄土宗大年表』五三三頁など
- ※ 11 『常憲院殿御実記』、『隆光僧正日記』など
- ※ 12 写しが祐天寺にある。
- ※ 13 『隆光僧正日記』三、三六、三七頁